2026年度春学期　関西大学総合情報学部
帰国生徒入学試験問題

小　論　文

注　意　事　項

1. 試験開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
2. 別紙解答用紙所定の欄に受験番号を記入してください。
3. 解答はすべて黒鉛筆（HB）〈シャープペンシルは、HB0.5mm 以上の芯であれば使用可〉で別紙解答用紙所定の欄に記入してください。
4. 試験時間は90分です。
5. 問題は2種類あります。問題A、問題Bのうちいずれか1つを選択し、解答してください。両方を解答することはできません。
6. 解答用紙は、必ず、選択した問題番号用の用紙を使ってください。

問題A

次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

【問１】文科系学問を学ぶ意義は何か。医学と対比しながら、200 字以内で記述しなさい。
【問２】下線の「大学教員の役割」とは何か。 150 字以内で記述しなさい。
【問３】文理総合の総合情報学部で学ぶ意義をどう考えるか。 著者の意見を踏まえつつ、400 字以内であなたの考えを述べなさい。

医学は科学ではなく、技術だとよく言われます。医学部を卒業する人の圧倒的多数は臨床医になるために、正しい治療の仕方を大学で学ぶ。自分の創意工夫で勝手な治療をされては危険です。医学が技術だと言われる所以です。

それに対して哲学や人文・社会科学では、答えよりも問いの立て方、つまり考え方自体を学びます。法学・語学・経営学などの実学を除けば、文科系学問は実際の生活にほとんど役立ちません。しかし、これは悲観論ではない。人間の世界は謎ばかりです。それなのに性急な答えを無理に求めると、問いが小さくなってしまう。極端に言えば、材料は社会学でも心理学でも経済学でも何でもよい。個々の知識よりも、どのように問いを立てるかを学ぶ方が大切です。この講義では影響現象をテーマに選びましたが、それは単なる例にすぎません。社会心理学を材料にしながらも、そこから、より一般的な問い、自分自身の問いを見つけなければ、勉強の意味がありません。

西洋の哲学はどれもプラトンの脚注にすぎないと言ったのはイギリスの哲学者アルフレッド・ホワイトヘッドです。2500 年前にすでに基本的問いが提示され、答えもほぼ出尽くしているならば、学問の進歩という考え方自体が意味を失います。なぜ我々は繰り返し古典を学び、先達が格闘した問いに改めて立ち向かうのか。生老病死・存在・時間・愛・悪など、どのテーマをとっても究極的答えがあるとは思えません。それでも問い続けるのは何故か。

過去に培われた知識の伝達よりも、自ら思考する主体の生産が大学に課せられるべき任務だとドイツの哲学者フリードリヒ・シュライアマハーは説きました。この意味をよく考えましょう。知識を得るだけなら、教科書を参照すればよい。<u>大学教員の役割</u>は、本や論文の内容をわかりやすく噛み砕いて繰り返すことではない。そんなことをしてもらわなければ勉強できない学生が大学にいるのが、そもそもおかしい。それに、時間をかけて練り上げられた教科書以上に上手く説明できる教員は多くないでしょう。

知識は加算的に作用して我々の世界観を豊かにするのではない。逆に、今ある価値体系の見直しにこそ、教育の真価があると思います。知識の獲得とは、空の箱に新しいものを投入するようなことではありません。記憶と呼ばれる箱には様々な要素がすでに詰まっている。何らかの論理にしたがって整理された要素群の中に、さらに他のものを追加する状況を想像しましょう。そのままでは余分の空間がないから、既存の要素を並べ替えたり、知識の一部を破棄しなければ、新しい要素は箱に詰め込めない。

知識の欠如が問題なのではなく、その反対に知識の過剰が理解を邪魔します。外国語学習や海外留学の真の目的は情報収集ではない。異なる発想に接する機会の方が重要です。グローバル化に対応できる国際人を養成するという目的で国際文化学部・国際教養学部・国際学部などという名称の組織が多く作られました。しかし、どこの文化でも生きられる国際人の養成など本当はどうでもよい。逆に、どこにいても常識に疑いのまなざしを向ける異邦人への誘いこそ、学生のために大学がなしうる最高の贈り物だと私は信じます。

我々は答えを早急に求めすぎる。大切なのは答えよりも問いです。思考が堂々巡りして閉塞状態に陥る時、たいてい問いの立て方がまちがっている。授業で私がよく挙げる、こんな話があります。

ある夜、散歩していると、街灯の下で捜し物をする人に出会う。鍵を落としたので家に帰れず困っていると言う。一緒に捜すが、落とし物は見つからない。そこで、この近くで落としたのは確かなのかと確認すると、落としたのは他の場所だが暗くて何も見えない、だから街頭近くの明るいところで捜しているのだと。

我々は捜すべきところを捜さずに、慣れた思考枠に囚われていないか。我々の敵は常識です。常識の中でも倫理観は特にしぶとい。感情に流されていては、人間の本当の姿は見えません。

出典：小坂井敏晶著　『社会心理学講義＜閉ざされた社会＞と＜開かれた社会＞』　筑摩書房　2013 年
（出題の都合上一部改変）

以上

問題B

次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

【問１】「シンギュラリティ」とは何か。人工知能の進化との関わりを踏まえて、200 字以内で説明しなさい。

【問２】著者が下線部「これは技術の問題ではなくて、文明自体の問題である。」と述べる意図を 150 字以内で説明しなさい。

【問３】人工知能と人間は今後どのように協調すべきか、あなたの考えを 400 字以内で述べなさい。

1997 年に IBM がチェスで人間の世界チャンピオンを破って以来、次はもっと複雑な日本の将棋が目標になった。21 世紀に入ってしばらくの間、開発が進み、いまや将棋もコンピュータがプロの棋士を凌駕するに至った。

（中略）

コンピュータの能力はすさまじい。近い将来、人工知能が人の知能を超え、科学研究や技術開発も人工知能が行うようになるという予測がある。

考えてみれば、蒸気機関、車、計算能力、記憶など、機械は次々と人の能力を超え、独自の技術を成熟させて、人々はこれを活用する社会を作ってきた。状況の認識、推論、問題解決法の発見など、これまで人でなければできないとされた知的な領域に、人工知能が進出する日は近い。

では、本当に人間の知的能力を超えるのだろうか。個々の知的要素を取り出してその能力を調べれば、たしかに人間を超えても不思議はない。しかし、心を持ち意識を持つ人間のように行動できるかは疑問である。

（中略）

人工知能の発展によって、社会に大きな変革が起こるとされる。これを第 4 次産業革命と呼ぶ。多くの仕事がコンピュータに奪われ、産業構造が変わり、失業者が続出するという警告が出されている。さらに、人工知能が自分で新しい技術開発をしてその産業化を行えば、あとは加速度がついて技術が爆発的に進展し、人間はいらなくなるという。この時期が 2045 年という予測があり、これを「技術的特異点（シンギュラリティ）」と呼ぶと述べた。

これは、現実のものになるだろうか。

私はこのシナリオを信じない。永年の進化の結果として生まれた人間はさすがに強靭で賢い。機械が進歩すれば、それと協調し、それを使いこなす道を常に見つけてきた。これが我々の文明であり、社会である。機械が賢くなれば、人間もそれに適応して賢くなる。途中でいろいろな軋轢があっても、人間は人工知能を自分のパートナーとして活用し、新しい文明を発展させていくだろう。

しかし、楽観は許されない。人は賢いと同時に愚かであり、目先の利益に捕らわれる。思い込みも多い。いまの文明は、金銭への欲望が人を支配しているように見える。このため、貧富の格差が限りなく拡大する。この状況に対処するのに、偏狭なナショナリズムと国家間の利害対立を煽り立てることで、矛盾から目をそらせようという動きが目立つ。日本が世界に誇る不戦の誓いを捨て去る「戦争法案」がこんな中で成立した。こんな文明しか私たちは持てないのだろうか。こちらのほうがはるかに危険に思える。

人が金銭に支配され、同時にネットを通じて情報に支配されるほうが、私には恐ろしい。人工知能はそのための有力な手段となることもありうる。文明崩壊の危機については、楽観はまったく許されない。これは技術の問題ではなくて、文明自体の問題である。個々の人間が自由に輝くことのできる社会を実現してほしい。このための努力こそが人を輝かせる。

もっと短絡した話として、人工脳と人間改造がある。我々は、動力機械や輸送機械により技術を発展させただけでなく、自分自身をも改良してきた。たとえば衣服を着ることもその 1 つだったろうし、メガネは大変便利な装置だといえる。人工内耳は音の信号を聴覚神経に直接入れる。義足、義手、パワースーツも当たり前になっているし、人工網膜の計画もある。

それならば、外部記憶装置を脳に直結して用いるのはどうだろう。つまり、コンピュータのメモリを増やすように、脳の記憶容量を増やすのだ。

私などは人の名前がなかなか憶えられない。国際会議で外国人にあいさつされて、お前とは何年前に会った、などといわれると大変困ってしまう。漢字や英語の単語、さらに囲碁の定石などが外部装置に入っていて、脳がこれを活用できれば便利になるだろうか。

仮にこんな装置ができて、私の経験がすべて蓄えられていたとしても、これは私には使いこなせないだろう。自分の心が理解し、使いこなし、満足する範囲の装置でよいと思うのは、私が年老いたせいかもしれない。

出典：甘利俊一著　『脳・心・人工知能（増補版）数理で脳を解き明かす』　講談社　2025 年

（出題の都合上一部改変）

以上